

## テッドさんテーブルクロス 【宇宙戦艦ヤマト給仕長物語】【第 2 稿】

遠野秋彦

### プロローグ

君は知っているか。

宇宙戦艦ヤマト給仕長となったテッド・田名部が引き起こした 3 つの奇跡を。

そして、奇跡のテーブルクロスの物語を。

テッド・田名部は、テッドという名前を持っているにも関わらず生粋の日本人だった。彼がテッドという名前を与えられた理由は、両親が持つ欧州への憧れが理由であった。そして、欧州風の名前を役所は拒む根拠を持っていなかった。そういうことである。

彼は貧乏だったので若い頃からバイトに精を出した。

プロレスのジムで雑用のバイトをしている時に、レフリーが急に倒れたので彼は代役を務めた。その時に、プロよりも上手くやると目を付けられて、いつの間にか雑用のバイトから本職のレフリーになった。

だが、ガミラスの侵攻がそのようなテッドの運命を変えた。

プロレスの興行は真っ先に不可能になり、テッドは失業した。

もちろん、プロレスのジムそのものは潰れなかった。ガミラスの侵攻を生き延びる強靱な肉体を鍛えよう、という名目で入門希望者は集められたからだ。もちろん、遊星爆弾のせいで、入門してもすぐ死んでしまう者も多かった。だが、入門希望者の数はそれを上回った。

問題は興業の方だ。

いつどこに遊星爆弾が落ちるか分からない以上、客を集めて試合を行う

ための長期計画は立たなかった。かといって、建設中の地下都市での興業は無理だった。あくまで緊急避難用として建設中の地下都市には、人を集めてプロレスの試合を行うスペースが無いのだ。

必然的に、テッドの足は宇宙戦士訓練学校に向かった。

その時点で、衣食住が保証される最も確実な職業だったからだ。

しかし、そのような事情で志願した以上、戦う気は無かった。

できれば後方勤務が良いと思って、事務職を志願したが同じことを考える者は多かったのだろう。それは激戦になり、テッドは主計課の配属となった。

だが、それでも良かった。直接戦闘を行う戦闘部門や、艦外で補修を行う工作部門に配属されたら命がいくつあっても足りない。しかし、いざ戦闘になれば艦の最も安全な区画で戦闘糧食を作って配布する主計課は、生存できる確率が最も高かったからだ。

テッドは、その上で更に計算を行った。小型艦よりも大型艦の方が、装甲が厚く、生存できる確率が高い。そこで、大型艦への乗り組みを強く志願した。

大型艦は古参兵も多く、若い兵士達には居心地が悪いと敬遠する者も多かったので、割とスムーズにテッドの配属先は決まった。

地球防衛軍日本艦隊でも屈指の大型艦である 225 号艦への配属されたのだ。

しかし、ずっとプロレスのレフリーを行ってきたテッドに、料理の才能はなかった。

すぐに、厨房からは邪魔者扱いされるようになり、給仕専門になっていった。つまり料理には関与しないということだ。

しかし、給仕専門になると暇になるわけではなかった。

一般乗組員に対しては、自動的にトレイに料理を提供する機械のメンテナンスをしなければならない。一部の高級乗組員に対しては、直接料理を運ぶ必要もあった。戦闘配備になると、いちいちみんなが食堂まで来ることは不可能になり、弁当を運ぶ手間も発生したが、その手間はいつ発生するのか予測も出来なかった。

だが、テッドはその仕事に上手く適応した。

結局、腹を空かせて待っている兵士達を上手くあしらって食事を提供することは、レフリーの仕事と相通じるものがあったからだ。

扱う内容は違えども、結局は客の満足が大切だったのだ。

そして、その一点に関しては、テッドは他のどんな同年代の同僚よりも熟知していた。テッドは目立つ存在になった。

だから、225号艦の乗組員の一部が宇宙戦艦ヤマト勤務にスライドしていったとき、テッドもその中に入ることができたのだ。もちろん、テッドの年齢が18歳だったという事実も大きい。ヤマト乗組員は特に18歳の若者を選抜することにこだわったからだ。もし、彼が19歳や17歳ならヤマトには乗れなかつただろう。だが、18歳なら乗れるというものでもない。その点で、テッドは価値ある18歳だったのだ。

テッドは宇宙戦艦ヤマトに乗り組む際に、給仕長という肩書きをもらった。

## ミラクル1 フェアウェル

第1艦橋はいつも身勝手だ。

やりたいことだけを伝達してくる。

太陽系を離れる前に、全艦でフェアウェルパーティーをやりたいというのだ。

当然、艦の全員を集めてパーティーを行うことができる空間など、この宇宙戦艦ヤマトには存在しない。

側面の展望室での実施が第1艦橋の意向だったが、もちろん乗組員全員が入るだけの空間があるわけがなかった。

それに、もともとそんなパーティーを行うという予定もなかった。そんな心のゆとりはなかったのだ。

しかし、冥王星基地を陥落させ、残存艦隊も小惑星で上手く撃破したことで、第1艦橋はその心のゆとりを手に入れたらしい。

自信過剰気味になっている……とテッドは思った。

心のゆとりの有無と、パーティーが実行できる空間があるか否かの問題は全く別だ。

テッドはすぐに直接の上司であるコック長に予定の変更を申し入れに行った。

だが、コック長はすぐに嫌な顔になった。

彼は料理を用意するだけで手が一杯なのだ。

乗組員の数は十分ではなく、料理をする人数も足りているとは言いがたい。人数分の食事を用意するだけでもハードワークなのだ。

「場所の確保は君の仕事だ」とコック長は冷たく言った。

「指示された場所は、パーティーを開けるほど大きくはありません」テッドはやんわりと言り返した。

「だが、それは上からの指示だ」

「上からの指示でも下からの指示でも、無理なものは無理です」

「とにかく場所を確保しろ。無理だというだけなら無能扱いされるぞ。対案を示せ。それ抜きでは上には伝えられぬ」

テッドは肩をすくめた。

要するに、面倒はできるだけ避けたいのだろう。

命令は可能な限り遵守したい。

不可能でも、方法を変えて実現したいだけなのだろう。

テッドは、たった1人の部下である新松戸に相談した。

新松戸は即座に答えた。

「そうですね。確かに展望室は無理です。甲板でやったらどうでしょう?」

「全員で宇宙服を着てパーティーか?」テッドはバカかと思った。それでは酒も飲めない。

「いえ」と慌てて新松戸は否定した。「甲板を膜で覆うんですよ。内部は空気を満たしておきます。そういう装備があると装備マニュアルに書いてありました」

「そうか。膜か」テッドは喜んだ。「それが可能なら、パーティーは可能になるぞ。誰に言えばその膜を展開してもらえるんだ?」

「航海班だと思います」

「よし。航海長に直談判に行こう」

テッドは新松戸を連れてすぐに第1艦橋に上がった。

島航海長は、操縦桿を握っていたが、軽く添えているだけだった。

自動操縦で航行中らしい。

それなら話をしてくれそうだった。

テッドは島に話しかけた。

「なるほど。話は分かった。だが、その装備はまだテストもしていない。動作するかどうかは確約できないぞ」島は言った。

「それでも、もし動作すれば助かります」

島は振り返った。「太田、あれはすぐに動作テストできるか?」

「はあ。可能と思います。いずれにしても、オクトパス星団のあたりで

は宇宙気流が渦巻いているので、あれを展開せざるを得ないはずですので、それまでにテストはしなければなりません」

「パーティーには間に合うと思うか？」

「問題ありません。展開収納は5分以内にできるはずですよ」

「よし、じゃあ今展開テストをやってみよう」

「分かりました」

太田がパネルを操作した。

「大変です。膜が出ません」

「なんだと？」島の顔色が変わった。「すぐに真田さんに言って原因を調べてもらえ」

テッドは、太田と新松戸と一緒に工作室の真田のところに行った。

真田は表情を変えず、腕組みして話を聞いていた。

「話は分かった」と真田は言った。

「直りそうですか？」

「君たちは、沖田艦長が藤堂長官に【飛びながらでも多少の作業ができる】と見得を切って発進時期を前倒しした話を知っているかね？」

「いえ」一同は首を横に振った。そんな艦長だの長官だのという雲の上の人達の話など知らないのが当たり前だった。

「実はその【飛びながらできる多少の作業】が、甲板の防護膜なのだ。まだいくつかの部品が出来ていないので、膜を展開することはできないよ」

「でも、オクトパス星団あたりで必要になる可能性があると言われていきます」と太田が抗議した。

「それまでには完成させておくよ」真田は笑顔になった。

「ではこれから始まるパーティーには間に合いますか？」

「それは無理だな。万能工作機械をフル回転させても数週間を要する作

業だ」

テッドはがっかりした。

「それに完成しても寿命は長くないと思った方が良い。2回3回とは使えないと思った方が良いだろう」

太田は報告のために第1艦橋に戻り、テッドと新松戸は工作室から邪魔だと放り出された。

「さて困った」とテッドは考え込んだ。

「波動砲発射室はどうでしょう？」

「確かに広いが中央に波動砲があって、とてもパーティーはできない」

「エンジンルームは」

「同じことだ。波動エンジンをどかすことはできないよ」

「そうだ。格納庫ですよ。あそこは広いですよ。掃除が行き届かないというボヤキも聞いたことがあります。それだけ広いってことですよ」

「行ってみよう」

テッドは、格納庫に降りると、責任者のブラックタイガー隊隊長の加藤に直談判した。

「分かった。多少は融通を利かせられると思う」

「やった！」

「で、格納庫の何割ぐらいを提供すればいいんだ？ 2割か？ 3割か？」

「全乗組員を収容したパーティーですから、8割以上、できれば10割」

「それは無理だな」と加藤はあっさりと拒否した。

「なぜですか！」

「スクランブル発進するブラックタイガーを待機させておく必要がある。パーティーに使えるのは格納庫の最大5割。それ以上は無理だ」

「そこをなんとか」

「ヤマトを守るための手段だぞ。それを取り除けというのは、死にたいのか?」

そこまで言われるとテッドには言い返せなかった。

テッドと新松戸は自分達の部屋に戻ると、畳まれたテーブルクロスを前にまた相談した。

「他にできることはないか」

「無限に広がる大宇宙で、宇宙遊泳パーティーなんてどうですかね。宇宙酔いができれば、アルコールを消費しないで酔えます」

「バカ」

テッドは新松戸を殴った。

「待てよ」テッドは考え込んだ。

「何か良いアイデアでも?」

「無ければ作れば良いのだ」

「は?」

テッドは以前見たプロレスの会場を思い出していた。

そこは、とてもプロレスができるほど広い部屋ではなかった。

ところが、待っていると壁が動いて大きな空間が出現した。

可動式の間仕切りだった。

小さな部屋を多く貸し出すときは壁を出し、大きな空間が必要になれば壁を収納してしまうのだ。

「これだ」

テッドは真田のところに戻った。

そして、真田に説明した。

「パーティー中だけ展望室付近の壁を外して、空間を広げれば良いのですよ。これで全乗組員を収容できるパーティー会場を確保できます」



「テッド君」と真田はニコリともしないで言った。「それは机上の空論というものだ」

「いえ。できるはずですよ。さっき間仕切りの壁を1枚外してみました。ビスを外すだけです」

「では質問しよう」真田は言った。「ヤマト艦内の壁面を構成する材料は交換用の装甲板を兼ねているので、かなり重いはずだ。艦内の1G重力下では、人間10人で持ち上がるかどうかという重さだろう。それを君たち2人だけで持ち上げたのかね？」

「いえ。丁度通りかかったアナライザーに持ち上げてもらいました」

「なるほど。艦内にアナライザーは1体しかいないから、必要な壁を全てアナライザーに移動させると3日掛かる計算になる」

「えっ？」テッドは真っ青になった。「それではパーティーに間に合いません」

「では不可能ということだ」

テッドは、とぼとぼと自分の部屋に戻った。

お気に入りのテーブルクロスが綺麗になって折りたたまれて置かれていた。

洗濯が終わったらしい。

テーブルクロスよ。

何か良い知恵を授けてくれ。

テッドはテーブルクロスに祈った。

だがダメだった。

小さく折りたたまれたテーブルクロスは何も語ってはくれなかった。

テーブルクロスのように、パーティー会場を小さく折りたためれば良いのに……。

その時、テッドはハッと気付いた。

このヤマトのサイズはおかしい。

場所によってスペースが大きく違うのだ。

「新松戸」

「はい」

「巻き尺を持って宇宙服を着て、格納庫の上の甲板の横幅を図ってこい」

「は？」

「いいから早く」

「は、はい」

テッドは巻き尺を持って、格納庫に降りると、横幅を図った。

「何をしているんだ、おまえは」とブラックタイガーを整備していた加藤が呆れた。

「重要なことです。ちょっとサイズを測らせて下さい」

数字が揃うとテッドは新松戸を連れて真田のどこかに歩いた。

テッドは真田に数字を突きつけた。

「真田さん。格納庫のサイズは、内側から図ったときと外側から図ったときでは違います。内側から図るとずっと大きいのです。なぜですか？ ヤマトにはどんな秘密があるんですか？」

「なるほど。それに気づいてしまったのか」真田は腕を組んだ。「それで君はどうだと思ふのだね？」

「空間を歪曲させて、空間をより広く使う技術があるはずですよ。おそらくイスカンダルからもたらされた技術かその応用でしょう」テッドは説明した。

「それは、極秘事項だ」と真田は言った。「ヤマト乗組員でも限られた者にしか開示されていない。実は古代戦闘班長ですら知らないのだ」

「なぜですか？」

「見かけ以上の戦闘機を搭載することで、戦闘力の誤認を誘うためだ。このヤマトの全長は 265.8m というになっているが、実際には 500m 級の戦闘力を秘めているのだ。だが、それは秘匿させている。敵にこちらを過小評価させるためだ」

「なるほど。やっと謎が解けました。弁当を運んでいると、どうしても話通りのサイズとは思えなくて」

「なるほど。足を使っている君にはばれてしまったというわけか。それで君の望みはなんだね？」

「展望室をその技術で拡張してパーティーを可能とすること。それができれば、今の話は全て忘れます」

「機密は守られるというわけか」

「そうです。悪い取引ではないでしょう？」

「残念ながら、我々には君を機密保持の義務違反者として告発することもできるのだよ」

「まさか」

「だが、それ以前の話をする、我々には現在展望室を拡張できるほどのエネルギーのゆとりが存在しないのだ。発想が良いことは認めるが、残念ながら君の願いは叶えられない」

テッドは落胆した。

食堂でテーブルクロスを前にテッドは突っ伏した。

そこで声を掛けてくる者があった。

通信班長の相原だった。

「どうしたんですか、テッドさん」

「パーティーを行うにはエネルギーが必要だが、ヤマトの艦内のエネルギー

ギーは足りないそうだ」

「エネルギーですか？ それなら多少なら増やせるかもしれませんよ」

「えっ？」

「実は今の通信状況だと通信は1人5分が限界だと分かってきました。予定よりも通信に必要なエネルギー量は少なくて済むんです。その分だけ他の目的に回せますよ」

「そうか！ ありがとう通信班長！」

テッドは真田の部屋に戻った。

「どうですか！ これなら足りえますか？」テッドは詰め寄った。

「まだ足りないな」と真田は冷酷に言った。

「そうですか……」

「だが……」と真田は言った。「甲板の防護膜のパーツを作成している万能工作機械を止めればエネルギーは足りそうだな。あれは、オクトパス星団に間に合えば良さそうだから、一時止めても問題はあるまい」

「それじゃ！」

「ああ。私が責任を持って展望室の空間を拡張しておこう。パーティーは可能だ」

テッドは幸運のテーブルクロスにキスをしてパーティーの成功を祝った。こうしてテッド第1の奇跡は成就した。

## ミラクル2 送還

テッドは艦長室に呼ばれていた。

今頃パーティーは大盛況であろう。

だが、いざ始まってしまうとテッドは暇になった。

厨房から酒や料理を運ぶことは新松戸に仕切らせておけば良い。

酒や料理の減ったテーブルに追加するだけで良いからだ。

もはや、動き出したシステムはテッド抜きでも動き続ける。

あとは、沖田艦長がパーティーの終わりを宣言するか、厨房の食料が尽きるまで、このままの体制が続く。

「艦長、お呼びでしょうか」

「うむ」沖田は振り返った。「今、わしは2つの難題を抱えておる」

「2つと申しますと?」

「1つは古代の問題だ」

「戦闘隊長の」

「あいつは肉親がいない。心のケアが必要だ。だが、それはわしがなんとかしよう」

古代の兄を殺した責任を感じているからですか?という質問をテッドは飲み込んだ。

その代わりに別の質問をした。

「それで2つめの問題は?」

「実は藤堂長官がとんでもないことを言ってきたのだ」

「と申しますと?」

「ヤマト乗組員の森君以外の女性乗組員全員が、手違いだったというのだ」

「えっ?」

「ヤマトがワープしてしまうと彼女らを地球に戻すことはもうできない。だから、至急地球に戻すようにとの連絡だ」

「沖田艦長はそれに同意しているのですか?」

「している」

「それはなぜですか?」

「わしは放射能除去装置を受け取って必ず地球に戻るつもりでいる。しかし、誰も死なないで済むとは思っておらん。復活した地球で子供を産む女性は可能な限り死なせてはならないのだ」

「それはそうですが」

「それにヤマトの食糧事情は厳しい」

「口減らし……ですか」

それに対する返事は無かった。

当然だろう。

艦長は話題を変えた。

「本当の問題はここからなのだ」

「といたしますと？」

「女性乗組員達にこっそり打診したところ、一致団結して退艦を拒否してきたのだ」

「えっ？」

「ここまで覚悟を決めて乗り込んだ以上は、今更降りられないというのだ」

「気持ちは分かりますが」

「テッド君、森君以外の全女性乗組員に、ワープ前に退艦するよう説得してはくれまいか」

「でも、なぜ私に」

「奇跡を起こした男、テッドなら可能だと思うからだ」

「はあ」

テッドは部屋に戻ると、畳まれたテーブルクロスを見ながらため息を付いた。

「どうしたらいいんだ」

「そりゃ、まずは当事者の話を聞いてみないと」

「わあ! テーブルクロスが喋った!」

「新松戸ですよ」と衝立の向こうから新松戸が出てきた。「テッドさんこそっかしい」

「紛らわしいんだよ!」

「でも一理はあるでしょう?」

「じゃあ、女性乗組員を何人か連れてこい!」

新松戸はすぐに対象の女性を3人ほど見つけて連れてきた。

だが、その数倍の男も着いてきた。

もともと人数が少ない女性乗組員は人気があるのだ。

「さて」テッドは一同を見回して考えた。

何を話せば良いのだろうか。

プロレスのレフリーなら言うことはたいてい決まっていって迷うことはない。しかし、女性を相手にすると話は別だ。

ともかく、テッドは話を聞くことにした、自分から言うべき意見など無かったからだ。

女性の1人が言った。

「女をみんな帰して、この若い熱気は誰が受け止めるんですか。まさか森さんが全員の相手をするなんて無理でしょ? それともみんなホモに改造するの?」

一理はあった。

さすがに、森雪1人だけ女性を残して艦が上手くまとまると思えなかった。

しかし、テッドは甘いマスクのアイドルレスラーに群がる女性達の振る舞いを通じてよく知っていた。人数だけ釣り合っていれば済む問題ではな

いのだ。必ず人気は偏る。しかも、人数は噛み合ってすらいなかった。現状ですら、女性と男性の比率は約 10 倍。女性 1 人で男性 10 人の相手をするというのも非現実的だ。

そこを指摘すると論旨を変えてきた。

「女性を違うものとして扱うのは男女同権の考えに反します」

その点での論旨は明快だった。

だが、数を減らした人類の復興のためには子孫が必要なのだ。

そのためには、子供を産める女性の損失は最小限にしなければならない。

男は 1 人で複数の女性を妊娠させることができるが、女性が一度に産める子供は通常 1 人きりなのだ。

男女同権を持ち出せるほど、人類にゆとりはない。

最終的に、話は別の場所に落ち着いた。

もし、人類滅亡までに放射能除去装置を持ち帰れなかった場合、人類は死滅する。生き延びるのは、宇宙にいた少数の者達だけだ。つまり、ほぼヤマト乗組員だけが生き残るのだ。

それが送還を拒む女性乗組員達の本音だった。

さすがに、テッドはその本音だけは論破できなかった。

テーブルクロスを前にテッドは苦悩した。

「どうすればいいんだ。どうすれば彼女らを説得できるんだ」

「冷凍睡眠室に全員ぶち込んで、眠っているまま送り返したらどうでしょう？」新松戸が言った。

「それができれば苦労はしないよ」

テッドはテーブルクロスを手を取った。

すると、隙間から名札が 2 つ落ちた。

藪とかいう機関員の名札と、女性乗組員の名札だった。



「ははは」と新松戸は笑った。「きっと藪はスケベな目で女性乗組員を見ながら食事していたのだと思いますよ」

「藪って、あの陰険スケベそうな機関員か?」

「そうですよ。あいつきつと、こっそり復讐ノートとか付けてそうじゃないですか」

「それだっ!」

テッドは立ち上がった。

テッドは女性乗組員の代表を集めた。

そして、【人類救済計画ノート】と書かれたノートを見せた。

「これを見せてくれ」

「なんですか?」女性達はそれを手にとって開くと顔をしかめた。

「誰が書いたノートかは分からない。ただ、機関室の近くのトイレで見つけたと新松戸は言っていた」

「きつと藪だわ」

「藪ノートよ」

「藪と決めつけるのは感心しないが、内容は誰が書いたものであろうと感心しない」

「そうね。居住可能な惑星に達したら、そこで全女性乗組員を拉致して脱走して強制移住。しかも、全女性は全メンバーの共通財産として共有するって。正気じゃ無いわ。女を、子供を作る道具としか思っていないわ」

「どうだろう。犯人が誰かは知らないが、そいつ1人だけがこんな計画を立てているとも思えない。安全のためにヤマトを降りた方が良いと思う」

結局、女性乗組員達は同意した。彼女らは生き延びたいとは思っているけど、男の奴隷になりたいと思っているわけではなかったのだ。

またしても、テッドのミラクルが決まった。

女性乗組員達が小型艇で離艦するとき、森雪がテッドに質問した。

「私も同行しようかしら。私には召喚命令は出ていないけれど、女性に対する恐ろしい企みがあるのでしょうか?」

「同行する必要はありません」

「どうして? みんな、藪ノートに恐ろしいことが書いてあると言っていたわ。私もその藪ノートをチェックしたいわ」

「無意味ですよ」

「女なんかいくら拉致されても関係ないというの?」

「いいえ。あのノートを藪が書いたというのは、単なる彼女らの憶測。本当は私が書いたのです。ヤマトを離れたくなるように」

「えっ?」

「だから、あのノートはもうゴミ箱に捨てましたよ」

「じゃあ、あんな恐ろしい計画を立てた乗組員は誰もいないのね?」

「ええ、いませんとも」

森雪は安心して職務に戻って行った。

テッドのミラクルはまたしても艦内に轟いた。

不可能を可能にする男、テッドの名は、特に艦内の下層で広まっていった。

もっとも、ゴミ箱に捨てたノートを本当に藪が拾ってしまい、そのノートを参考にイスカンダルで反乱を起こして森雪を拉致してしまったのは、テッドの予想外の結末であった。

しかし、それはまだ遠い先の話であった。

テッドは、幸運のテーブルクロスにキスをして送還の成功を祝った。

こうしてテッド第2の奇跡は成就した。

### ミラクル3 超巨大テーブル

「今日は気分が良いので、幹部を集めて食事をしたい。大きなテーブルをみんなで囲んで」

沖田艦長の希望は厨房に激震を走らせた。

料理の方はコック長が悩む問題だった。

食糧不足の艦内でいかにそれらしい料理を作るか。

テッドの抱えた問題は別だった。

ヤマトの食堂に、そんな大きなテーブルは存在しない。いや、艦内を全部探しても希望に添うテーブルは存在しなかった。

「奇跡を起こすミラクルのテッドならできるはずだ」とコック長はテーブルの問題をテッドに丸投げした。

ともかく無いものは作るしかない。

テッドは真田のところに行った。

「万能工作機械で、こういうテーブルは作れませんか？」

「ふむ。テーブルか。作るのはたやすいことだ」

「ぜひお願いします」

「順番待ちの最後に入れておこう。出来上がりは一ヶ月後でいいか？」

「それじゃ会食に間に合いません！ いったい機械は何で塞がっているんですか！」

「沖田艦長の病状悪化で、佐渡先生から次々と医療器具の注文が来ていてね。さすがに艦長の命にも関わるから、後回しにはできないのだよ」

テッドはがっかりして、部屋に戻った。

テーブルクロスを見ながらテッドは悩んだ。

「じゃーん。テーブルクロスの奥に隠れているのは誰でしょう？」

「新松戸だろう」

「あたりー」

「ふざけてないで、出てこい」

「ところでこれはどうでしょう」

不定形の大きな木の板を持った新松戸が出てきた。

「おい。どうしたんだ、こんな板」

「いえね。ビーメラ星に立ち寄ったでしょ？ あの時に採取した植物のサンプルを捨てるというのでもらっておいたんです。これに足を付けたらテーブルになりませんか？」

「でかしたぞ、新松戸」

これで大きなテーブルが用意できる。

だがコック長は即座に却下した。

「フランス料理のフルコースを出すと決めた。こんな野蛮な板はフランス料理に相応しくない。テーブルはきちり四角でテーブルクロスを掛けてくれ」

テッドはまたテーブルクロスを見ながら考え込んだ。

新松戸が言った。

「やっぱり、また真田さんに頼んで、波動エネルギーでテーブルを大きくしてもらいますか？」

「パーティー会場とはわけが違うんだぞ」

「ダメですか？」

その時テッドはハッとした。

「おい。もしかしたら、大きな思い違いをしていたのかも知れないぞ」

「へっ？」

「沖田艦長は、そんなに無理難題を押しつけてくる人じゃない」

「といたしますと？」

テッドは新松戸を連れて食堂に走った。

食事時では無いからそこは無人だった。

「こうするんだ」

テッドは食堂のテーブルを全てくっつけて並べた。

「段差があって、1つのテーブルとは言えませんよ」新松戸が言った。

「分かっている。アナライザー」

アナライザーが予備の装甲版を持ってきた。

それをテーブル群の上に乗せると重さで平滑になった。

「まさか!」

「あとはこれ」

その上からテッドはテーブルクロスを掛けた。

超巨大テーブルがそこにあった。

テーブルクロスは細部を全て隠してくれた。

小さなテーブルの集合体にはともて見えない。

「さすがです。奇跡の人、テッドさん!」

不調の相原という問題はあれど、会食は成功した。

テッドは幸運のテーブルクロスにキスをして超巨大テーブルの成功を祝った。

こうしてテッド第3の奇跡は成就した。

## エピローグ

君は知っているか。

奇跡の給仕長テッド・田名部の最期を。

そして、奇跡のテーブルクロスの物語の結末を。

テッドは宇宙戦艦ヤマト艦内での功績により、ラランド 21185 第 4 惑星基地の主計課チーフに抜擢された。

その惑星は、地球からはかなり遠かったが、恒星の中ではかなり地球に近い部類に入るので、大規模な基地が設営されて観測員が数百名常駐していた。

その惑星に突如落下してきたのが、少女の姿をした所属不明サイボーグだった。

「私は奇跡を起こすサイボーグ」と彼女は宣言した。「奇跡を 3 度も起こした地球人テッドがここにいるとの情報を得て飛来した。そして彼の奇跡のテーブルクロスもここにあると聞いた。私とテッド、どちらの奇跡が本物か勝負をしたい」

戦力らしい戦力を持たない観測基地であるし、地球からの応援が到着するまでにワープを使っても 1 日は待たされそうだった。

そのため、基地の指令は戦いを望まなかった。

できるだけ平和的に問題を解決しようと、テッドは対応を命令された。

テッドは仕方なしに彼女に対応した。

「私がテッドだ。そしてこれが記念品としてヤマトから廃棄されるところをもらってきたテーブルクロスだ」

「テッドさん、テーブルクロス」サイボーグ少女はジロリと見た。

「君の名前も教えてくれ」

「名前は無。生命維持度ゼロの限界に挑むために製造されたサイボーグだ。確率 99 パーセントで生命を失う前提で作られたサイボーグは名前など与えられない」

「だが何か識別する方法があったはずだ。君には仲間のサイボーグはいなかったのか？」

「私の他に 2 人いた。そうだ。彼らと区別するために、マークワン、マークツー、マークスリーという呼称があった。私はマークスリーだ。しかしこうして単独で行動しているときは使っていない呼称だ」

「好きではないのだね?」

「そうだ」

「では限界に挑むサイボーグに敬意を表して、リミットと呼ぶことにしよう」

「それは構わない」

「ではリミットちゃん」

「なんだ、テッド」

「私には奇跡の対決という概念が理解できない。奇跡とは起こそうと思って起こせるものではないだろう?」

「奇跡とは起こるものではない。起こすものだ。信念さえあれば神は微笑む」

「サイボーグとじっくり神を信じるのか?」

「神は実在する」

「なるほど。ならば私の負けだ。私には神さまの姿は見えないし、微笑んでもらうこともできない」

「しかし、おまえは奇跡を 3 度起こしたのであろう?」

「そう言われている」

「なぜ 4 度目を起こせない」

「君は意図しただけで奇跡を起こせるのか?」

「そうだ。ミラクルの少女だからな、リミットは」

「ではここで奇跡を起こせば君の勝ちだ。これで納得して帰ってくれるかい?」

「いいだろう。リミットは嘘を言わない」

「ではどんな奇跡を起こしてくれるのかね?」

「この基地を5秒で壊滅させよう」

「いくら何でも5秒は無理だ」

「ミラクルな少女は、願えば何でも叶うのだ。だが自分まで巻き込まれてしまうから、基地からは離れよう」

テッドとリミットは基地を離れ、全体を見渡せる丘の上に立った。テッドは宇宙服を着ていたが、リミットは着る必要が無かった。

「では始める」

リミットは、指を鳴らした。

基地の全ての建物が爆発炎上した。

ほとんど一瞬で、全職員が死に絶えた。

機材も破壊されて、計測器も止まった。もちろん、破壊を免れた計器が無かったわけではない。しかし、エネルギーの供給が絶たれては、機能停止するのが当然だった。

「大変だ。救助に行かないと」

テッドは丘を駆け下りた。

それがテッドの最期だった。

建物の2次爆発が生存者を探すテッドの宇宙服を直撃した。

即死だった。

4度目の奇跡は起きなかったのだ。

このとき基地に起きた爆発の正体は、その後の調査で判明している。事前にこっそり基地を訪問したリミットは、光学迷彩で自分の存在を秘匿した上で全ての建物に爆弾を仕掛けていたのだ。

それはトリックではあったが、それこそがリミットにとっての【真の奇



跡】だったのだ。

勝利を確信したリミットは、爆発が収まるのを待って、基地の残骸を檢分した。

テッドの遺体もあった。

まさにリミットの勝利だった。

だが、その隣の建物を見に行った時にリミットは顔色を変えた。

まるで洗濯直後のように綺麗に折りたたまれた白いテーブルクロスが残されていたのだ。

他のどんな道具も炎で焼かれて原形を留めていなかったのに、まさに奇跡だった。

リミットは確かにテッドには勝った。

だが、テッドの奇跡のテーブルクロスには勝てなかったのだ。

リミットは、テーブルクロスを粉々に引きちぎると、二度と地球人類の前には姿を表さなかった。

おわり

## 解説

本作品は、【テッドさんテーブルクロス外伝】は存在するのに本伝が存在しないのはおかしいという理由で書かれている。

しかし、【テッドさんテーブルクロス外伝】との関連性は一切ない。

従って、本作の主人公は【テッドさん】である。宇宙戦艦ヤマトには登場していない人物であるが、先に【テッドさんテーブルクロス外伝】というシリーズ名があるので止むを得ない。ついでに助手も宇宙戦艦ヤマトには登場していない新松戸を設定した。新松戸の新は新米からもった新で、最期の【戸】は、テッドのドからもらったのだ。

しかしながら、本作は【ヤマトの展望室はパーティーができるほど大きくない】【女性乗組員が消えた】という2つの大きな謎に答えを付けられたので、変な意味での存在意義はあるものと思う。

本作はテッドさんとテーブルクロスが起こす3つの奇跡(ミラクル)という話にまとめられている。だから、各章にはミラクル1 ミラクル2 ミラクル3 というサブタイトルが付いている。

エピローグにミラクル少女が登場するのは、ミラクル4の代わりである。4の代わりに何か言葉が欲しいと思って【少女】を選んだ。しかし、破口のハコちゃんや、マゾッ子メグミちゃんは登場しない。

最後にテッドさんが死んでしまう結末になっているのは、奇跡を起こす男がこの世界においては歴史が変わってしまうからだ。テーブルクロスが破られることも同じだ。

ラランド 21185 は太陽系から近い恒星系で、距離は 8.21 光年。実在する恒星だが暗いので肉眼では見えない。第4惑星は完全に架空。

ちなみに、リミットの裏設定は、地球から出発した無人の深宇宙探査機が何か得体の知れないものと合体して戻って来たノーマッド的というか、

ヴィジャー的な存在である。それゆえに、リミットは地球の言葉を理解して地球人のように振る舞う。無人探査機なのにサイボーグという設定に根拠はない。没設定としては、リミットブレイクしてシークメイトするというアイデアはあった。

## 遠野秋彦作品宣伝 2015/4/20 版

### マル計画ロボット第2号【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00V8JT3UK/>

時は2015年。正義をなすために作られたロボット、マルコはテロ組織の都市を破壊した。だが、被害を最小にするためには最善だったと主張するマルコの主張は受け入れられなかった。都市にいた手テロ組織とは関係ない人々を殺すことは社会が許容しなかったからだ。そこから真の正しさ、真の降伏を求めるマルコの長い旅が始まる。やがて、コロッサ計画のロボット、コロッサスがロボットだけの理想郷を作ろうと決起した。はたしてマルコがロボットの側に立つのか。それともマルコの正義を承認しなかった人間の側に立つのか。そもそも、この話はジェッ〇ーマルスなのか、鉄腕ア〇ムなのか、それとももっと別の何かなのか？

### 父殺し戦争【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00OJYDYBU/>

オランダ第2王子ジョークオル・グレスフォは実は女だった。父親の身勝手に男として育てられていたが、ジョアンナと名を変え、女性として別の星の大学に留学していた。

だが、ジョアンナには秘密があった。長年、男だという欺瞞を貫き通してきたジョアンナは男と恋をすることも許されず、いつの間にか獣や異星人しか愛せない体質になっていたのだ。

女なのに男扱いされることに嫌気が差したジョアンナは、留学生のタバチーネ人ドッチーと駆け落ちし、宇宙船プレアデス III で勝手気ままに旅に出た。

ところが、彼らの前に謎の脅威が出現した。

人類を創造したホモ・スペリオールは、密かに人類を去勢して滅ぼす計

画を立てていたのだ。ジョアンナは、人類去勢計画を叩きつぶすために実家の兄に連絡を取る。

「オランダ軍の2号反応爆弾を1つ。理由は聞かずに調達してください。兄上の力があればできるはずですよ」

だが駈け落ちして家出した妹の頼みは聞き入れられるのか？

本当に人類を創造するほど優れた者達に勝てるのか？

オランダの王室に存在しないはずの【皇帝】という肩書きを名乗る人物が出現し、謎の【監視者ファミリー】が暗躍して、ジョアンナを破滅に誘う。

ジョアンナは最後まで降参せず、ぎりぎりの矜持を貫けるのか!?

ホモ・スペリアル惑星破壊ビーム砲台から放たれる超長距離狙撃が人類の居住惑星を次々と破壊していく中、はたして人類に起死回生の策はあるのか？

**アニー・ザ・ビアン・キューティー【Kindle版 (Amazon)】**

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00OJYDW8A/>

レズビアン、世界征服、キューティー・○ニーという3大キーワードを与えられて作者が渾身で挑む問題作。

内蔵された愛情回路に強制されて戦う愛の戦士の悲しい宿命。

レズビアンの巣窟、全寮制、男子禁制の学園に送り込まれたアニーちゃんは男を忘れてしまうのか。

仮面の忍者レッドは敵か味方か。はたまた男か女か。

たった3分しか維持できない筋力強化でアニーちゃんは世界を守れるのか!?

アニーちゃんに内蔵された空中【幻想】固定装置を敵から守り抜けるのか？

そして、アニーちゃんの死んだはずのパパが!

### 人造人魚【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00L9D496S/>

コジフ商会のキア・コジフは姉の代理で商談をまとめてきた。しかし、正体不明の MMM という商品が含まれていることに不信を感じた。そして商談の帰路に嵐に巻き込まれた。濁流のクライン川にちらりと見えた人魚はいったい何か。そして、キアは女装のメイドに招かれるままにエム・エムエ幻想国のズイン科学侯爵の屋敷に立ち寄った。だが、その屋敷こそが謎の商品 MMM の製造場所であった。はたして、こっそり製造されている MMM の正体とは人魚なのか。誰が何のために人魚を求めるのか。そして、河の中に見えた人魚の正体は? 屋敷の入口にある肖像画の主であるゾ・フィーネという女性はどこに消えたのか? 謎が謎を呼ぶエロティック幻想物語。

そして、屋敷の謎を解いたキアが選ぶ驚きの選択とは?

君の五感と股間を刺激する!

### コードネームはサターン V【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L5L4Q2G>

謎を提示するミステリアス小説。解くのは君だ!

独身中年男を心配する親からの依頼で、一人暮らしのダメダメ変態マニア男、佐藤有紀を監視する探偵の鞍馬七郎の物語。

そして、高級マンションで優雅に暮らす佐藤有紀が、セーラーレオタードで美少女戦士に変身して人知れず侵略者と戦うサターン V の物語。

どちらの物語が事実なのか。はたして、佐藤有紀の正体はダメダメ変態マニア男なのか、侵略者と戦うスーパーヒロインなのか。

謎の女、SOS のナナコの正体は、探偵鞍馬七郎の変装なのか。それとも、

佐藤有紀をスカウトに来た銀河連邦の宇宙警察機動軍なのか。

矛盾をはらんだ物語が読者を迷宮に誘う。

真実はどこにあるのか。

結論は本文のどこかに書き込まれているぞ。

それを探す冒険物語の第3の主人公は読者の君だ!

### ミルクボーイ【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L9D48WI>

世界は核のスイッチを持つ巨大な9人の赤ん坊に支配されていた。

そして、彼らに飲ませるため、教室で搾乳する少女がいた。だがクラスメートは彼女に無理解だった。丹生川タクミは彼女を守るために立ち上がった。

ところが、支配者の1人、ホモ疑惑がある七試が男ミルクを所望したことで、話は急転する。タクミも男ミルクを下半身から搾乳される立場になった。

授乳特選隊に入隊したタクミは驚愕の事実を知る。それまで女性隊員しかいなかった極東支部には、女性用の制服しなかったのだ。似合わない女性用制服を着て七試と面会するタクミ。しかし、七試はそれを喜んだ。

はたして、七試はホモなのか?

そもそも、巨大な赤ん坊ベイベーズとは何か?

テロリストに襲撃され、配下のスタッフを多数殺された七試は、怒りに狂っておしゃぶりに偽装した核のスイッチを押した。

はたして、世界は9人の赤ん坊の気まぐれで滅びるのか?

人類は生き延びることができるか?

結末を予測不能の幻想未来冒険譚が始まる!

### リバーシブル【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2>

フォッカーD21 で始まり Yak-3 で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカートレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人か大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

### リ・バース・リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56>

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか! アンドロギュノスから産まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

### 異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し!【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW>

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女



山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか！そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか！

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊！

## 全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC>

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ2つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを受け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラークはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリカは大空洞の果てに何を見つめるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。  
読むならここから始めよ!

### ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE>

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの人として扱われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真意とはいったい!?

### セラ姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4>

普通的女子高校生の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んでその破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも……。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編！ これを読まずにラト姫物語は終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ！)

### 魔女アーデラの事件簿【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS>

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか？ だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラは GM なのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説！

君は腕力では無く知力を試される！

### ファンタジー勇者伝説

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W>

君は知っているか！ 勇者の伝説を！ このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を！

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒したのではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。

勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ！

ジーナは叫ぶ。

一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな！

彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか！

イーネマス！ 【全編(完結)PDF 版】

[http://www.dlsite.com/maniawork/=product\\_id/RJ039225.html](http://www.dlsite.com/maniawork/=product_id/RJ039225.html)

イーネマス！ 【立ち読み版(全 16 章のうち第 5 章まで。無料) PDF 版】

<http://ura.autumn.org/Content.modf?id=20080428000000>

若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来人制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売

買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱することができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり